

女性人物形象に視点を据えた『好色一代男』構成試論

— 卷六の目録に見られる年齢の錯記及び卷五・六・七の章構成について —

小 榊 雅 典

はじめに

西鶴の「好色一代男」（以降「一代男」と呼ぶ）は、一卷七章（卷八のみ五章）構成の全八巻、計五十四章からなる、主人公世之介の一代記である。その「一代男」における構成論が、近年盛んに行われるようになってきた。五十四章の内、何れの章から成立していったのかを順次明らかにしようというのである。

そもそもそういった研究が盛んになったのは、卷六の目録に記載された世之介の年齢の錯記に契機があったと言つて過言ではない。では、その卷六の目録に記載された世之介の年齢の錯記とは如何なるものであろうか。

実は、この作品の各巻頭には目録が付され、世之介の年齢が記載されている。つまり、この作品は世之介の年齢を意識しながら、世之介の好色的成長を讀んでゆけるところに一つの工夫がなされている。ところが、卷六の目録には、その世之介の年齢に狂い

が生じているのである。卷五の目録の年齢が重複して記載されているのだ。ただし、これ以上の詳細については、この「はじめに」では触れないで、現段階で一つだけ明らかなることを述べるに留めておきたい。それは、この世之介の年齢の錯記を如何に解釈してゆくかが、延ては「一代男」の構成を論ずることにつながってくるということである。

そこで、私はこの問題を論ずるために、新たな一つの観点を導入することにした。それはごくあたりまえの、それでいて見落とされがちな観点である。つまり、私は「一代男」に登場する数多くの女性人物形象に着眼することにしたのである。というのも、西鶴は「一代男」をたんなる遊女評判記に仕立ててはいないからである。「一代男」を読めば、一目瞭然、西鶴の創作意欲は世之介に向けられていただけではなく、数多くの女性たちにも向けられていたのである。殊に卷五以降は、その傾向が顕著であると言える。したがって、女性人物形象に着眼しないわけにはいかないのである。

そのために、まず私は「二代男」に描かれている全ての女性人物形象を独自の観点から分析、検討することにした。そして、本稿ではその分析結果をもとに、「二代男」の抱える難問、巻六の目録に見られる世之介の年齢の錯記について考えてゆきたいと思う。

一

問題の核心に触れる前に、まず、問題の概要について確認しておきたい。

先程も触れたように、「二代男」は一卷七章（巻八のみ五章）構成の全八巻、計五十四章から成っている。書き出しの巻一の一段で世之介は七歳。したがって、一章一年の割合いで各章が展開していくから、第一部（注1）が終熄を迎えた巻四の七で世之介は三十四歳、また、第二部の巻五の七では四十一歳となっている。ここまでは目録にも狂いは生じていない。問題はこれからである。このまま世之介が順調に年を重ねてゆけば、巻六は四十二歳から始まり、四十八歳で終わっていなければならない。しかし、巻六の目録には三十六歳から四十二歳までと記載されている。そうかと思えば、巻七以降は修正が加えられ、巻七の一が世之介四十九歳、最巻末の巻八の五は六十歳と落ち着いている。これを如何に解釈すべきなのであろうか。

また、もう一つの疑問がある。それは巻四の七で二万五千貫目（この金額についても諸説があるが、ここでは約百二十五億円と

推定しておく）という莫大な遺産を相続したはずの世之介が、巻六の一、「三笠」の章で、

その年より宿も定めず、権左衛門方にて三笠にあひそめ、何事も命ぎりとしあはせて、初めの程はおもしろく、中程はをかしく、後は気の毒かさなり、宿よりは前簾の書出し、親方よりはせかるる。

と、突然借金で首が回らない状況に追いやられていることである。

これは巻五の全七章の間、すなわち七年間に、世之介がその莫大な遺産を使い果たしてしまったことを意味しているのではない。なぜならば、世之介は女護島に舟出する巻八の五で、「残りし金子六千両、東山の奥ふかく掘り埋めて」いるからである。しかも、その章の冒頭には、三十四歳で莫大な遺産を相続した世之介が、二十七年目の六十歳までにその遺産の全てを使い果たせなかったことを立証する記述があるのだ。

合二万五千貫目、母親よりずいぶん遣へと譲られける。明暮たはけを尽し、それから今まで二十七年になりぬ。

それなのに、世之介四十二歳―目録には三十六歳と記載されている―の巻六の一で、西鶴はなぜ借金に窮する世之介を設定する必要があったのであろうか。

さらに、これに纏わる疑問として、以下に記す巻一の一の記述を取り上げることができる。

五十四歳までにたはぶれし女三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人、手日記にする。

この周知の記述中に見られる「五十四歳」は西鶴の誤記ではないのだろうか。それというのも、「一代男」は世之介五十四歳で幕を降ろすのではなく、六十歳で幕を降ろすからなのである。巻一の一で七歳であった世之介が、その年を含め五十四年経過した巻八の五で、六十歳にならないのはおかしい。

以上のように、巻六の目録に見られる世之介の年齢の錯記は、それに纏わる疑問をも絡め、あわせて三つの問題をはらんでいたのである。

二

これら三つの問題を説明してゆくために、まず着眼しなければならぬのが、巻五の一、巻六の一、巻七の一の女性主人公の特徵とそれらの章配置である。実は、これら三人の女性主人公は、その何れもが「廓の倫理を超脱した名妓」たち〈注2〉なのである。しかも、「玄人の女性たち」〈注3〉の四類型〈注4〉の中において、西鶴が最も力を入れて描いた「廓の倫理を超脱した名妓」は、これら三名を置いて他にはいない。そのうえ、第二部冒

頭の巻五の一は「世之介最愛の五人女」〈注5〉の中で最高峰的存在にある「吉野」の章である。となれば、これら三章が各巻頭に配置され、現在の順（巻五の一に「吉野」、巻六の一に「三笠」、巻七の一に「高橋」という順）に配列されたのも偶然ではなかったような気がしてくる。（「廓の倫理を超脱した名妓」の章配列が、現在の順になった詳細については、紙幅の関係上割愛することにする。）そういえば、「一代男」にあって、唯一二章が連続したストーリー展開を持ち、かつ「五人女」の一人でもあった「追分の女」の章も、巻四の冒頭（一・二章）に配置されていた。さらに、これに関連して指摘すれば、世之介最初の女郎買いとなった巻一の五にも、そのイニシエーションに相応しい「撞木町の遊女」が配されていたのである。（ただし、この章は巻頭に配置されていない。しかしながら、西鶴好みの人物形象を備えた女性が、世之介の最初の女郎買いというイニシエーションとして大切な場面に設定されていることは事実である。）これは強調したい人物形象を作品展開上において重要な場面に、しかも巻頭のような印象的な場面に配置する、西鶴独自の、創作活動における一傾向を物語っているのである。

次に着眼しておかなければならないのは、巻五の二から七までの六章である。というのも、これら六章は第二部において異質な章群であると指摘できるからである。以下、その異質性について言及することにする。

西鶴は巻四をもって、何とか第一部を終わらせようとしてい

た。それは西鶴が、第二部で「三都の遊女」を扱わなければならない、という確固たる創作意識を持っていたからなのである。言わば、西鶴がこのような意識を持つに至ったのも、全ては「一代男」という作品自体が帯びていた性質のためなのである。「五十四歳までにたはぶれし女三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人」の中には、もちろんのこと「三都の遊女」も含まなければならなかったのだ。そうでなければ、世之介は好色道を極めることができなくなってしまうのである。

そういった事情のもと、西鶴は第二部の終わり、「火神鳴の雲隠れ」（巻四の七）で、世之介を一旦死の瀬戸際まで追いやっておき、蘇生させるといふ離れ業をやつてのける。しかも、この蘇生は「粹人」としての変身を意味していた。そのうえ、西鶴は世之介に莫大な遺産をも相続させるのである。つまり、ここで西鶴は、世之介が憚りなく「三都」という大舞台に登場できる条件を揃えてやったのだ。

とするならば、問題の六章の舞台は、当然「三都」でなければならぬはずである。それなのに、実際の舞台は地方の遊廓に移っているのである。さらに驚くべきことに、六章中の二章の世之介が、大大大尽とも思えぬ粗末な出立ちで作品世界に登場しているのである。また、プロットに着目すると、当の二章はその世之介が身なりで人を判断してしまふ不粹な「地方の遊女」を指弾してゆくという同パターンとなっているのである。

しかし、これは見方によれば、異質にあらずと言えるのかもしれない。なぜならば、第二部の地方遍歴を行う世之介に、西鶴は

第一部の地方遍歴とは異なった「美の審判者」としての役割を担わせているからである。こういった役割は第二部でなくては担わせることができない。したがって、このように考えるならば、第二部の地方遍歴は、西鶴があらかじめ構想していたものであったとも言えないわけではない。

ところが、そうではなく、問題の六章は後に構想外のものとして付け加えられた公算が大きいのである。そして、前述の世之介に与えられた「美の審判者」としての役割も、巻五の一（「吉野」の章）を書き始めた段階の西鶴には意識されておらず、新たに六章を付け加える過程で初めて強く意識されたとの見方が可能となってくるのである。（この点については、「三」で詳述する。）そうでなければ、「一代男」全五十四章の章配列に趣向を凝らしている西鶴が、問題の六章だけに同パターンの二章を構成している説明がつかなくなってしまう。

「二」の締め括りとして、ここでもう一点付言しておかなければならないことがある。それは、巻六と巻七の章構成に、明らかに工夫された西鶴の編集意識を見出すことができる、ということである。

まず、それを巻六に見てみよう。巻六は一章から四章までに「廓の倫理を超越した名妓」、「廓の倫理に忠実に生きた名妓」、「廓の倫理と自己の感情との狭間に揺れた名妓」、「三都にも居た不粹な遊女」と、遊女の「四類型」が順に配列されている。これは、西鶴が各類型を偏りなく描こうとした意識の現われであ

る。続く五章から七章までには、「廓の倫理に忠実に生きた名妓」が三章連続しているが、決して画一化した内容にはなっていない。それどころか、各章にはそれぞれ独自の趣向が凝らされているのである。しかも、このように三章を連続させることが、却って「廓の倫理を超越した名妓」である「高橋」の人物形象を一段と強調することになったのである。(これと同様なことが巻五の六・七と巻六の一との間に言える。)これも西鶴の綿密な計算のもとに行われた章配列であるとしか言いようがない。

また、巻七も各類型が織り混ぜられて配置されている(「廓の倫理を超越した名妓」、「大尽遊び」、「三都にも居た不粹な遊女」、「廓の倫理に忠実に生きた名妓」、「廓の倫理と自己の感情との狭間に揺れた名妓」(二章連続)、「大尽遊び」の順)。特に、その中でも、五・六章の「廓の倫理と自己の感情との狭間に揺れた名妓」である「和州」と「吾妻」の章配列に、西鶴の苦心の跡を見出すことができるのである。そこでの西鶴は、五章の「和州」と六章の「吾妻」の人物形象に若干の相違を持たせている。詳述すれば、「吾妻」の人物形象は、どちらかといえば、巻六の三の「藤波」の延長線上に位置付けられているのに、それであるが、西鶴は「和州」、「吾妻」と連続配置しているのだ。つまり、その第一の意図は、両者を対置させることによって、同類型にある両者の人物形象の相違を浮き彫りにすることにあつたのである。また、第二の意図は、「吾妻」の人物形象を読者の脳裏に印象付けると同時に、「藤波」の面影を髣髴させることにあるのである。(この点に関しては三のとこで詳述している。)

さて、愈々本題に入らなければならないが、以上の事柄を念頭に置いて、私は次のように「巻六の目録に見られる年齢の錯記」の原因を考察している。

西鶴は巻一の一から巻四の七までを書き終えた。第一部を完成させたのである。そのときの西鶴には、これから「三都の遊女」を描いてゆく構想があつたのである。それは女性人物形象を描き上げることに筆の勢いを得た西鶴が、最も腕の見せどころと思われる「三都の遊女」を意識して、第一部の最終巻(巻四)を焦って終熄させようとしていたことから分かる(この点については、「二」を参照されたい)。

そこで、筆の勢いもあつて、西鶴は「三都の遊女」の中でも最高峰的存在にあり、しかも「五人女」の中でも最高峰の総合体である「吉野」の章の執筆にかかつたのである。

「吉野」の章は「三都の遊女」を扱う最初に持ってこなければならぬ。これは疑う余地のない、西鶴の意識であつたらう。西鶴が全勢力をかけて描き上げる(読者にとつても)強烈な人物形象を備えた女性主人公の登場は、世之介が三都に足を踏み入れるというイニシエーションが設定された巻五の一でなくてはならなかつたのである。読者への鮮明な、そして感銘を与える手法は、常に西鶴の脳裏を占めていたのである。

「吉野」を描く西鶴の筆は留まりを知らなかつたようである。

「吉野」は人工培養の非日常的好色空間を超脱した聖精神界に居住する、前代未聞の遊女として描かれたのである。

ところが、西鶴は「吉野」を描いた後、どうやらこれまでの草稿を投げ出してしまったらしいのである。そして、その根拠は三つある。

まず一つめは、「二代男」の巻尾にある西吟の跋文である。

(前略)ある時鶴翁へ小樹注 西鶴の許に行きて、秋の夜の楽寝、月にはきかしても余所には漏れぬむかしの文枕とかいやり捨てられし中に、転合書のあるを取集めてあらましにうつして……(後略)

〈小樹注 前・後略は、小樹が行った〉

ある秋の夜に、西鶴の許を訪れた西吟が、昔の草稿だと積み重ねてあった中に、悪戯書きを見つける。それは余程おもしろかったに違いない。西吟は自らその草稿を浄書するのである。

ところで、そこで問題になってくることがある。西吟が目を通した、積み重ねてあった草稿とは、一体「二代男」のどの巻までであったのだろうか。

私はそれを巻一から巻四の第一部と「吉野」の章までであったと推察する。つまり、西吟は、西鶴が「吉野」の章まで書いて放置しておいた「二代男」の草稿を、適々訪れた秋の夜に目にしたのである。そうして、そのおもしろさに感服し、西鶴に急いで続きを書くことと、同時に出版することを催促したのである。一

方、草稿を投げ出しておいた西鶴も、それを契機に再び「二代男」の筆を執る決意をしたのである。したがって、草稿放置(フランク)後、まず着手したのは「三笠」の章(現在の巻六の二)だったのである。

次に、二つめの根拠ということになるが、ここで「三笠」の章の設定を想起しなければならない。この章での世之介は大大大尽として振る舞っていなければならないはずであるのに、何と金に窮していたのである。

つまり、これは「吉野」の章を描き終えて「三笠」の章を描くまでの西鶴に、かなりのフランクがあったことを物語っているのである。すなわち、「三笠」を描き始めた西鶴には、「吉野」を描き終えたときのような、世之介が大大大尽になっているという意識は薄らいでいたのだった。そのような意識よりも、むしろこの時の西鶴には、世之介と「三笠」との恋、換言すれば、「三笠」の人物形象(世之介に逢うことのできない身となり、しかも親方の拷問に堪えながら、世之介を恋慕うという「三笠」の人物形象)を理想化するための設定を工夫しようとする意識の方が強く働いていたのである。そのうえ、「大行は細瑾を顧みず」という性格の西鶴である。「三笠」の人物形象を理想化するために、世之介を貧窮のどん底に陥れることぐらい容易なことだったのである。

では、なぜそうまでして、西鶴は「三笠」の人物形象を理想化しようとしていたのであろうか。これに答えることが、ひいては三つめの根拠を述べることになる。

世之介を主人公とした一代記を書くこととしていた西鶴が、西鶴自身知らぬ間に、女性の描写に気持ち悪く奪われていたことは明らかである。その顕著な例が巻五の一の「吉野」である。西鶴の女性人物形象に奇せる理想化の思いが絶頂を迎えたのは、やはり「吉野」の章であったと言えるであろう。その「吉野」は、廓という人工的な好色空間に居住する「遊女」と「太夫」との関係に観念的な矛盾を抱いたがため、「廓の掟」を破ることになってしまふ。またそれと同時に、そういった姿勢が理想化されるという人物形象を与えられていたのである。

一方、筆の勢いは留まらず、西鶴はもう一人の「廓の倫理を超越した名妓」、「三笠」の理想化を始めた。しかしながら、「吉野」同様の理想化を行うような西鶴ではない。そこは手だれ者のこと、また別の理想化に取り組まなければならない。そこで西鶴は、世之介への赤裸々な恋慕、言うなれば、自己の感情に忠実に生きることによって太夫という立場を放棄した（そのために「廓の掟」を破ることになった）「三笠」を描くことにしたのである。そして、その構想を練り上げるために、西鶴は長い時間を必要としたのである。

以上に述べてきたことも、「三笠」理想化の疑問に対する一つの解答であると言ふことができるが、私には、この疑問に対する、もう一つの解答が用意されているような気がしてならないのである。ただ、その解答というのも、全く私の当て推量に過ぎないことは、今ここで明確に断わっておかねばならないだろう。

確かな証拠を揃えることはできないが、西鶴が、世之介のよう

にとまではいかなくても、莫大な遺産を相続できる家柄に生まれていないことは少なくとも事実であるらしい。西鶴の生まれは商人の中でも中流の中といったところであったようだ。となると、第二部で莫大な遺産を相続した世之介に、作者である西鶴が乗り移ってゆく可能性は稀薄になってしまはずである。その証拠に、主人公であるはずの世之介が、その主役の座をしばしば揺るがされたのが殊に第二部であり、しかも諸氏の間でも、第二部における世之介の実態が不鮮明になっていると言われて久しくなるのである。すなわち、これは西鶴に大大大尽となった世之介相應の経験がないことを物語っているのである。

経験がなくても、「三都の名妓」と言われた遊女たちを理想化して描かなければならないのが、「一代男」の筆を執った西鶴の宿命である。太夫の敵になったことがないからといって、「一代男」を「地方の遊女」級の女郎たちで終わるわけにはゆかないのだ。

しからは、どうやってその難局を乗り切り、その太夫たちを理想化して章を構成してゆけば良いのか。

それには経験のある者に、太夫の様子を語ってもらふしかない。すなわち、聞き書きをするしか術はないのである。聞き書きをすれば、語ってもらった太夫像が必然的にクローズアップされることになる。世之介の実態が稀薄になってしまうのも、無理のないところである。したがって、第一部の女性の描き方と第二部のそれと比較してみれば、その傾向が顕著であることが分かってくるはずである。もう少し具体的に述べよう。第一部は世之

介を女性に巧みに介入させてゆくことによって、女性の人物形象が滲み出てくるといった描き方がなされていたのである。それに對して、第二部は世之介がたんに女性の人物形象を引き立てるためだけの道具として使用され、あからさまに女性人物形象が強調、表現されるに留まっていたのである。

こういった事情を推測してみれば、「三笠」の人物形象が強調されるのも当然といえるのではなからうか。また、それと同時に、「吉野」の章(巻五の一)を書き終えた西鶴が、「三笠」の章(現在の巻六の一)に着手する間に、かなりのプランクを要したことも推し測ることができるのである。

このようにして、「吉野」、「三笠」の章と書き進めてきた西鶴であったが、四類型の中でも、西鶴が最重要視していた人物形象を備える「廓の倫理を超越した名妓」を三章連続して配置するのでは味がない。また、それでは彼女たち一人ひとりの人物形象を強調することができず仕舞になってしまう。そこで、それを懸念した西鶴は、「廓の倫理を超越した名妓」はひとまずここで置き、続いて「廓の倫理に忠実に生きた名妓」を書くことにしたのである(現在の巻六の二―世之介の実質年齢、三十七歳)。西鶴が「廓の倫理を超越した名妓」の後に、「廓の倫理に忠実に生きた名妓」を描くのは、必然的な流れであったのだ。というのも、四類型の中で、「廓の倫理を超越した名妓」の次に西鶴が大切にしたい遊女群といえ、何を隠そう「廓の倫理に忠実に生きた名妓」だったからである。(この詳細についても、ここで述べる

ことはしない。)それも「廓の倫理に忠実に生きた名妓」の代表的位置にある「夕霧」を描いたのだ。

以降、西鶴は第二部に登場してくる遊女たちの類型紹介をも込めて、「廓の倫理と自己の感情との狭間に揺れた名妓(藤波)」と「三都にも居た不粋な遊女」を書き連ねてゆく(現在の巻六の三・四―世之介の実質年齢、三十八・三十九歳)。もちろん、これも四類型の中で西鶴が気に入っていた人物形象順に書き連ねたものである。

ここに至って、西鶴は巻五(現在の巻六)の章配置に不満を抱くようになる。それというのも、「吉野」、「三笠」、「夕霧」、「藤波」、「不粋な遊女」という章配列では、「世之介最愛の五人女」であり、かつ第二部の最高峰的存在である「吉野」の人物形象がぼやけてしまうからである。そこで西鶴は、四類型の中でも最重要視している人物形象を備えた「吉野」、「三笠」、「高橋(現在の巻七の一)」を各巻頭に出す配置替えを考案したのである。それと時を同じくして、西鶴には、「吉野」の人物形象を際立たせるためにも、「吉野」を他の類型の名妓たちとは並べて配置しないという意識が生まれていたのである。

以上のような理由で、「吉野」は別の巻に配されることになったのであるが、「吉野」が所属する巻を「三笠」の所属する巻に後置するわけにはいかない。なぜならば、何度も繰り返すように、「吉野」は第二部の最高峰の総合体であり、第二部の冒頭で「粋」を身に付けて変身した世之介にあてがってやらないとなら

ないからである。すなわち、「三笠」以降「不粋な遊女」までの巻が、ここで改めて巻六に仕立てられることになったのである。

西鶴は猶も巻六を書き続けた。それが現在の巻六の五から七である。が、西鶴の脳裏では、巻六を執筆中にもかかわらず、世之介の年齢はそのままの進行を続けていた。また、西鶴の頭には、世之介がこのまま年を重ねてゆけば、最巻末の巻八の五では五十四歳になるということもあつたに違いない。巻一の一を世之介七歳で書き始めたことを忘れ、「源氏物語」の強い影響を受けた西鶴としてみれば、これ幸いとも言ふべき運びとなつていたのである。それと同時に、巻六を主に「廓の倫理に忠実に生きた名妓」の巻に、また巻七は「廓の倫理と自己の感情との狭間に揺れた名妓」の巻に仕立てるといふ漠然とした構想を西鶴は抱いていたのである。その証拠に、巻六の五・六・七章は、現在の巻七の一の女性主人公、「高橋」の人物形象を際立たせるべく、「廓の倫理に忠実に生きた名妓」で固められているのである。

巻六を書き終えた西鶴には、「高橋」を巻頭に据える巻七も、巻六と同様に四類型を組み入れる構想が立っていた。(先程も触れたが、この時に巻七を「廓の倫理と自己の感情との狭間に揺れた名妓」色ある巻にしたいという構想も立っていたと考えられる。)それは、「三都」を舞台上に第二部を描こうとしていた西鶴の構想として、極めて当り前のものであつたらう。それに加え、世之介が莫大な遺産を相続したことを忘れていなかった西鶴はいくら「大行は細瑾を顧みず」という西鶴であつても、このよう

な大掛かりな設定を忘却の彼方に押しやってしまうことはあるまい。巻七以降に「大尽遊び」の章を配置することも構想に入れたのである。

西吟は度々西鶴の許を訪れたのではなからうか。そして、「一代男」の早期完成を心待ちにしながら、書き上った巻から持ち帰り浄書して、印刷に回したのであろう。したがって、西鶴は巻六の目録に世之介の年齢を錯記したまま、出来上がった草稿を西吟に渡したに違いない。出版を急がされていた西鶴の脳裏には、「吉野」の章を分離した後の章群(現在の巻六)が、巻六であることの認識はあつたものの、世之介の年齢までに意識が及ばなかつたのである。

巻六を西吟に手渡した西鶴は、分離した「吉野」の章に続ける巻五の本格的な構想に入つた。その時点において、すでに巻七の構想はできている。(また、これから述べる巻五の構想も、「吉野」の章を分離した時点で、西鶴には脱げながらも意識されていたかもしれない。)そこで、さて何を書こうかと思案を始めた西鶴は、巻五、巻六、巻七と同趣向の巻が三巻も続くことに不満を抱くに至つた。しかも、巻五を巻六、巻七と同趣向で描いていては「吉野」の人物形象を顕著に浮き立たせることができないばかりか、これでは「吉野」の章を分離した意味がない。思案にくれた西鶴は、巻五が不粋な「地方の遊女」を多く集めた第一部に近いことを想起し、「吉野」の章の後に不粋な「地方の遊女」を置けば、「吉野」の人物形象が際立つことに気付いたのだつた。さ

らに好都合なことに、「吉野」の章の後に「地方の遊女」の章を置けば、「粋」を身に付けた世之介をいきなり三都に居続けさせなくて済むのである。つまり、巻五の一人で変身した世之介を地方にやることは、好色の地方遍歴という意味でのワンクッションを挿入した形となり、作品の流れから言っても第一部から第二部への移行を円滑に行えることになる。かくして、巻五の構想が固まっていたのであった。

西鶴がどれほどのスピードで各巻を書き上げていったのかは分からない。が、ともかくにも西鶴は巻五の完成を目指し、「吉野」の章以降を書き続けたのであった。

ところが、世之介が「美の審判者」となった今、図らずもその立場が第二部の「地方の遊女」の世界を画一化してしまうことになってしまった。「美の審判者」という固定的立場が、第一部の世之介から好色的な自由奔放さを剥奪してしまったのである。したがって、西鶴は手だれ者には珍しく、巻五の二と六に同、パターンの構造を持つ二章を配置してしまつたのである。

このような事情をもつた巻五も最終段階を迎えた。後は目録を作成するのみである。ところが、この段階に至って、西鶴は巻六の目録に年齢の錯記があることに気付いたのである。しかしながら、そうかといつて巻六よりも前に位置する巻五の年立てを、巻六の続きにするわけにはいかない。巻五はどうしても世之介三十五歳から四十一歳でなければならぬのである。そこで西鶴は、巻五の目録には正規の年立てをしておき、巻六の目録を訂正しよ

うと西吟を訪ねた。しかし、時すでに遅く西鶴が巻五を執筆している間に巻六は浄書され、その板木は掘り上つてしまつていたのである。

本来ならば、このような誤記は訂正されるべきものであろう。しかし、余程出版を急いでいたのである。(誰が急いでいたかと言えば、西鶴よりも、むしろ西吟の方であったかもしれない。)訂正の時間を執る暇もなく、西鶴は巻七を執筆しなければならなくなつてしまつたのである。このあたりは、さすが「大行は細瑾を顧みず」といつた西鶴らしさが出ているようである。したがって、当然のことながら、巻七の目録は正規の形に戻されたのである。

四

ところで、巻一の一に記された「五十四歳」を如何に解釈するかという問題が残っている。これは、諸氏も指摘しているように、西鶴の単純な誤記と考えて差し支えないのではなからうか。西鶴があまりにも「源氏物語」を意識しすぎたための結果と考えてよいだろう。内実は、世之介七歳から書き起こしたことを、ふと「一歳」からと錯覚した西鶴が、五十四歳で「一代男」を終わらせなければならぬから、最終章は五十四歳になると単純計算したぐらいのことであろう。

ところが、巻六の目録における年立ての錯記は、翌々年の貞享元(一六八四)年刊の江戸版には訂正が施されているのに、「五

「十四歳」は訂正されていないということに対する疑問が浮び上がらないでもない。しかし、「大行は細瑾を顧みず」といった西鶴が、巻一の一の「五十四歳」に気付いたかどうかも分からないし、たとえ気付いていたとしても、章数などに「源氏物語」を踏まえていることを知らしめたかった西鶴は、わざと「五十四歳」を訂正しないままで放置しておいたのかもしれない。

それに加え、「五十四歳」で終わるはずの最終章が切りの良い「六十歳」になってしまった。西鶴がこれ幸いと言ったかどうか知る由もないが、「還暦」の年に世之介を行方知らずにするのが可能となったのである。図らずも、それが「二代男」のフィナーレとして最高の脚色となったのであった。

以上、「五十四歳」の問題については、それほど神経を尖らせる必要はなさそうである。

おわりに

このように巻六の目録に見られる世之介の年齢の錯記について、その原因を私なりに説明してきたつもりである。しかしながら、その原因を完全に説明するためには、私が導入した女性人物形象の観点だけでは不十分であろう。それは私も能々承知していることである。今後、この女性人物形象の観点到新たな観点を付け加えることによって、再度問題究明に尽力したいと思ってい

る。
尚、本稿はその多くを西鶴研究の大家である浮橋康彦先生と

峻康隆氏の御考えに依拠している。殊に、西鶴が「吉野」の章を書き上げた後、「三笠」の章に着手したという考察は、浮橋康彦先生の御考えである。また、そのほかにも浮橋康彦先生からは、数々の貴重な御教示をいただいている。先生に深く感謝の意を申し上げるとともに、最末尾になってしまったが、先生の御還暦を心から御祝い申し上げ、本稿の締め括りにしたいと思う。

〈追記〉

本稿は一九八七年度卒業論文の「後編 第二章 『玄人の女性たち』を扱った章の役割とその構成」(三二九頁〜三五九頁)に加筆・修正を施したものである。したがって、卒論の一つの章のみを取り上げたがために、本稿における論拠の出所が不明確になっているところがあるかもしれない。謹んで御詫び申し上げます次第である。

注1 本稿でも述べてきたように、巻四の七は「二代男」のストーリーの展開上、大きな転換点となっている。つまり、この巻で世之介は第二の世之介として変身するのである。以降、巻五からは粹人世之介の「三都」巡りが始まることになる。そのために、これまでの数多くの研究において、本作品を二分する考えが出てくるようになった。また中には、それを根拠に作者複数説を唱える諸氏もいらしゃる。したがって、本稿でも便宜上本作品を「第一部」と「第二部」に二分して、論を進めることにしたのである。しかし

ながら、卒論の「後編 第三章 第二節女性人物形象から見た「第一部」・「第二部」の捉え方」で、私は本作品を二分する必要のないとの結論を得るに至っている。

注2

卒論の前編で、まず私は本作品に登場する女性たちを大きく二つに類別している。その一つが「素人の女性たち」であり、もう一つが「玄人の女性たち」である。この分類基準は売笑の有無に置いた。次に、「玄人の女性たち」を二分することにした。「地方の遊女」と「三都の遊女」とである。後者に言う「三都」とは「島原(京都)」・「新町(大坂)」・「吉原(江戸)」の三大遊廓街を指す。また、「地方の遊女」とは「三都」以外の遊廓に居住する遊女のことを言う。私はさらにここで「三都の遊女」の四類型化を試みている。その分類の観点には、「廓の掟」が多分に関与している。この「廓の掟」とは、日常的な世界には存在せず、遊女が居住する廓にのみ存在する「廓の倫理」のことである。本作品の「三都の遊女」の中には、この「廓の倫理」を超越することによって名妓と呼ばれた者もいれば、「廓の掟」を遵守し、「廓の倫理」内でその手腕を奮い名妓と呼ばれたものもいたのである。また、その中間に位置し、「廓の倫理」を超越したい気持ちに秘めながらも「廓の掟」を破れず、それに拘束されたままで葛藤に苦しんだ名妓もいたのである。一方、そうかと思えば、廓の世界に安住し、金銭欲と虚言のみで生き、世之介の指弾を受けた遊女もいたのである。私はそれらを順に、

「廓の倫理を超越した名妓」、
「廓の倫理に忠実に生きた名妓」、
「廓の倫理と自己の感情との狭間に揺れた名妓」、
「三都にも居た不粋な遊女」と命名することにしたのである。

注5

「世之介最愛の五人女」とは、本作品に数多く登場してくる女性の中で、世之介が特に愛したと思われる女性のことである。その女性の数は五名で、共通の特徴として、「やさし」という評価的語彙が使用されていることを上げることができる。

注3、4、6は注2を参照されたい。

*尚、本稿中の引用は「日本古典文学全集 井原西鶴集(1)」に依っている。

主な参考文献

- 浮橋康彦先生「西鶴文学の反語的性格」(『日本文学研究資料 叢書 西鶴』所収)
森山重雄氏「西鶴の研究」(昭和五十六年・新読書社)
暉峻康隆氏「西鶴 評価と研究「上・下」」(昭和二十三年・中央公論社)
同氏「西鶴新論」(昭和五十六年・中央公論社)
廣末保氏「西鶴の小説」(昭和五十七年・平凡社)
岸得蔵氏「仮名草子と西鶴」(昭和四十九年・成文堂)
谷脇理史氏「西鶴研究序説」(昭和五十六年・新典社)
同氏「西鶴研究論攷」(昭和五十六年・新典社)

吉行淳之介氏訳『好色一代男』(昭和五十九年・中公文庫)

(広島県立尾道東高校教諭)

巻・章	女主人公	類	目録の年齢	考察	備考
五の一	「吉野」	超	三十五	①	五人女V「吉野」は五人女の中でも最高峰的存在。つまり、「二代男」に登場する女性達のナンバーワンである。三都の遊女。 〔地方遍歴譚1〕 これより「美の審判者」と化した「粹人」世之介の地方遍歴が始まる。 〔地方遍歴譚2〕
二		不/	三十六	⑨	
三	「脇あけの女」	/	三十七	⑩	「脇あけの女」は神秘的色調でもって理想化された遊女。しかし、五人女にはなれない。というのも、「吉野」の人物形象を浮き彫りにするには、彼女が目立ち過ぎてはいけいなのである。
四		男	三十八	⑪	〔地方遍歴譚3〕 「東山」
五		不/	三十九	⑫	〔地方遍歴譚4〕 「堺」
六		不/	四十	⑬	〔地方遍歴譚5〕 「宮島」
七		不	四十一	⑭	〔三都の遊女〕 これ以降、舞台は三都に移るが、本章の遊女は不粋な遊女である。これは次章の「三笠」の人物形象を際立たせるために、設定されたものである。

① 巻五の一、巻六の一、巻七の一と、巻頭に「廓の倫理を超越した名妓たち」が配列されている。

② 「廓の倫理を超越した名妓たち」は、西鶴が「四類型」のなかでも最も力を入れた人物形象を有している。

③ 「廓の倫理を超越した名妓たち」の中で、西鶴が重要視した順に遊女達を並べると、「吉野」「三笠」「高橋」となる。要するに、巻五・巻六・巻七の順である。

④ 西鶴は強調したい人物形象を有する女性主人公を巻頭のような印象的な箇所配置する傾向がある。

⑤ 巻五の二から七までの六章は〔地方遍歴譚〕である。

⑥ 西鶴は世之介を真の「好色者」とするために、所謂第一部を何とかして終結させようとしていた。世之介を三都に乗り込ませるためである。そして、そのために、西鶴は巻四の七で世之介を死の瀬戸際に追いやり、「粹人」として蘇生させた。しかも、三都に乗り込むもう一つの条件を満たすべく、莫大な遺産を与えた。

⑦ ⑧の構想通り運ばなければ、〔地方遍歴

六の	二	三	四	五	六	七	七の	二	三	四	五	六	六の
一	二	三	四	五	六	七	一	二	三	四	五	六	一
「三笠」	「夕霧」	「藤波」		「初音」	「吉田」	「野秋」	「高橋」		「高雄」	「和州」		「吾妻」	「三笠」
超	忠	狭	不	忠	忠	忠	超	大	不	忠	狭	狭	超
三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	三十六
②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑮	／	／／／	／	／	／	②
莫大な遺産を相続したはずの世之介が、借金で首が回らないという状況に陥っている。矛盾した設定である。	「夕霧」は「廓の倫理に忠実に生きた名妓」の代表的存在である。	「藤波」は「廓の倫理と自己の感情との狭間に揺れた名妓」の代表的存在である。	以下、「廓の倫理に忠実に生きた名妓」が連続するが、これは、西鶴が巻六を主に「忠」の巻にしようとしたからである。	初めて「大尽遊び」の章が御目見えする。世之介の「女護島」渡りの準備が始まる。	以下、二章「廓の倫理と自己の感情の狭間に揺れた名妓」の章が連続するが、これは、西鶴が巻七を主に「狭」の巻にしようとしたからである。	「吾妻」は故人である。本章で世之介は彼女を回想するが、これはとりわけ世之介がこの世に未練を残さず、							

譚) が巻五に配列してあるのは納得し難い。

◎その上、問題の六章は「徴行」↓「見抜き」のパターンを二章も抱えている。章構成に綿密さを見せる西鶴が、連続した六章の内に、同趣向の章を二章（この二章は連続してない）も配置するのは珍しい。

その他、②―④に関連して、巻六・巻七には工夫された章構成が施されていることを付け加えておきたい。これが本来の西鶴による章構成である。

A巻六の場合―巻頭から四章目までは「四類型」が、遊女の類型紹介を兼ねるように、しかも、強調されるべき人物形象順に配列されている。五章目から巻末までは、「廓の倫理に忠実に生きた名妓」が三章続するが、それぞれの章には、それぞれの趣向が凝らされ、同類型の章が連続する印象を与えない。その上、三章を連続させたのは、巻七の「高橋」を際立たせるためである。

*巻六は西鶴の意図によれば、「廓の倫理に忠実に生きた名妓」を主に扱う巻だったと推察される。

B巻七の場合―西鶴は世之介を「女護島」に出発させるといふ構想のために、また、世之介の粹な大尽振りを描写するために（好色的成長の最終段階を示すために）、莫

〔第二部のみ作表〕

八の一	七					「女護島」に渡ろうとする伏線にな っている。 次巻が主に「大尽遊び」を扱う巻で あることを暗示している。
二	三	四	五			
「小紫」						
大	忠	大	大	大	大	
五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十	
/	/	/	/	/	/	
巻頭に「大尽遊び」の章が来るとい うことは、巻八が主に「大」を扱う 巻であることを物語っている。 巻八にアクセントを付けるために、 西鶴が最も描きやすかったと思われ る「忠」を持ってきている。 舞台を九州の丸山に移し、衣装人形 で大夫達を回想する世之介。「女護 島」への船出は目の前である。 「女護島」渡航。						

凡例

- A 表中の「類」は女性主人公の類別を示している。「超」：「廓の倫理を超越した名妓」「忠」：「廓の倫理に忠実 に生きた名妓」「狭」：「廓の倫理と自己の感情の狭間に揺れた名妓」「不」：「三都にも居た不粹な遊女」「大」：「大尽遊び」男：「男色を扱った章」廓：「地方の遊女」
- B 表中の「目録の年齢」は、各巻の冒頭に設けられた目録に記載された世之介の年齢である。
- C 表中に見える丸数字は、各章が書かれた順を示している。尚、これはあくまでも私の推察に過ぎない。また、中途 から／印が続くが、これは⑤以降が章の順を追って書かれたとする推察を示している。
- D 表中の「備考」は、私が施した分析の結果を簡潔に記したものである。

大な遺産を派手に使わせ始めることを考えた。したがって、巻八ではその多くを「大尽遊び」の章にあてがう伏線とするためにも、巻七に、最初と最後を締め括る形で「大尽遊び」の章を配置した。

一方で、西鶴には「四類型」を漏らしてはならないという意識が強かったのだろう。「四類型」は漏れなく描写されている。

*巻七は西鶴の意図によれば、「廓の倫理と自己の感情との狭間に揺れた名妓」を主に扱う巻だったと推察される。↓付言すれば、巻五は「廓の倫理を超越した名妓」、すなわち「吉野」が目立てば良い巻だったのである。